
リリカル・ブレイブ ～闇を抱きし靈魂使い～

八つ橋うい郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル・ブレイブ 　　闇を抱きし靈魂使い　

【Nコード】

N8098X

【作者名】

八つ橋うい郎

【あらすじ】

（昔諸々の事情で削除したものを改訂、再投稿したものです。）

優しい未来があったのは、別の次元の他人事。歩んできたのは厳しい現実。流れ着いた異世界で彼女を待つのは――？

プロローグ（前書き）

もう一作の完結が近い＆先の展開考え中のため、何故か頭の中でストーリーが進行していたこの作品を投稿することにしました。

プロローグ

魔界——それは闇の眷属たる悪魔共が闊歩する暗黒世界。力が全てを支配する弱肉強食、弱者必滅の無慈悲なる地。そんな魔界の一画、隕石や謎の金属塊が散乱、浮遊する場所——通称『星の墓場』に場違いな影が一つ。

「……………」

肩まである黄緑色の髪を後ろで一つに纏め、漆黒のロングコートに身を包み粗末な布袋を背負った女。悪魔ならば耳の先端が尖っているが、彼女のそれは丸い。彼女は魔界の住人ではない人間、名をマローネという。

そして彼女——マローネの周囲には、全身に幾つもの目を持つ三メートルほどの異形の悪魔——センチネルが倒れ伏していた。

「まだ、足りない……」

闇を纏った自分の手を見ながら呟くマローネ。

「もっと、もっと、ヤツを——」

彼女が言いかけた時、地響きのような音が轟き、空中に渦——時空の歪みが現れた。

「何！？ くっつ……！ ああっ——！」

堪えようとするが奮闘空しく、マローネは時空の歪みに吸い込まれる。暫くすると音が止み、同時に時空の歪みも消え去った。

「うゝん……、特に変わったことはないみたいツスね」

「面倒事が起こらなくてホッとしたようなつまらないような、何とも微妙な気分ツス」

「ともかく、戻って殿下に報告するツスよ」

「アイアイサーッス!!」

それからさらに暫くして、やって来たのはうる覚えで作ったペンギンのぬいぐるみのような三匹の悪魔——プリニー。何やらワイワイと騒ぐと、すぐに来た道を引き返していった。

星の墓場は地場や重力が不安定なため、たびたび異世界から様々なものが飛ばされてくる。そして、その逆も然り——。

第1話：漂着（前書き）

さっそくお気に入り登録してくれた方が一人いるようで嬉しい限りです！

第1話：漂着

ミッドチルダ、とある森林地帯。

「う、うう……。私は、確か時空の歪みに吸い込まれて……」

目を覚ましたマローネは立ち上がって軽く頭を振ると、体に異変が無いことを確認してコートに付いた土を払い落とした。視線を巡らせると、木々の向こうに町が見える。

「……とりあえず行ってみましょうか」

手のひらに出した長方形の黒い金属を地面に落とすと、一瞬淡く光りすぐに消えた。それを見届け、マローネは町に向かって歩き出した。

それから数分後……。

「次元震が観測されたのはこの辺りのはずだけど……、特に異常は無いみたいだね」

白い服を着た栗色の髪の女性が舞い降りてきたことは、当然マローネは知る由も無い。

ミッドチルダ首都、クラナガン。大勢の人々で賑わう町の中をマローネは歩いている。

（予想はしていたけど、やっぱりここはイヴォワールではなさそうね）

彼女の故郷『イヴォワール』は、海に浮かぶ大小様々な島で構成された世界。確かに城と城下町が乗るほどに大きな島もあるが、この都市はあまりにも大きすぎ、そして何よりも科学技術の差がある。ボトルメールを応用した船であるボトルシップが関の山のイヴォワールには、陸上で動く金属製の車など存在しない。

（全体的に清潔だし、見たところ治安は悪く無さそうだけど……）

そう考えを巡らせるマローネは、周りの人々の視線を集めていた。今季節は夏と秋の間ほど、そんな時期にロングコートを着ているマローネはどうしても目立つ。もっとも当の彼女は全く気にしておらず、

（中傷や石つぶてが飛んでこない分、向こうよりずっと歩きやすいわね）

むしろそんなことを思っていたが。

考え事を続けながら歩いていると、人気の無い廃墟が立ち並ぶ場所に着いていた。廃棄区画と呼ばれる所である。

（何かいる……）

このような場所はいわゆる日陰者の溜まり場になりやすい。職業がらその手の連中を相手取ることが多く気配に敏感なマローネは、思考を中断し警戒を強める。

ほどなくして現れたのは、日陰者連中ではなく丸い体をした赤銅色の生物が二匹。目と脚が無く短い腕と尻尾が生えていて、同族を丸呑みにできそうな大きな口が特徴的だ。

「……フッフ、アッハハハハハハ！」

球体生物を視界に捉えたマローネは哄笑を上げ、両頬が引き裂けんばかりに口の端を吊り上げた。

「こういうのを運命の再開って言うのかしら？　ロマンチックね反吐が出そう！！」

「ゲギヤツ！？」

球体生物に肉薄すると一体を蹴り飛ばし、左の手のひらに描かれた収納用魔法陣から反りのある黒い刃が付いた槍——スコーピオンを抜き放ち、もう一体を両断する。その僅かな間に球体生物の数は十倍以上に膨れ上がり、今もなお増え続けている。闇色に染まったスコーピオンに両断され、地面から飛び出す雷に消し炭にされるよりも、数が増える方が早い。

小さく舌打ちしたマローネは収納用魔法陣から金属板を取り出すと、球体生物の群れの中に投げ込みつつ叫んだ。

「彷徨える魂よ、導きに従い現れ出でよ！！　奇跡の能力、シャルトルーズ！！」

叫びに呼応して金属板が淡く光った次の瞬間つむじ風が巻き起こり、球体生物達がバラバラになりながら吹き飛ぶ。

「クオオオオオオオオオン！！」

その中心で遠吠えを上げるのは、刀のような一本角と赤い鬣たてがみを生やした狼、風を操る魔獣クーシー。

クーシーが駆け出すと再びつむじ風が発生し、球体生物が刻まれて

いく。マローネもまたスコピオンを振るい、危なげなく球体生物達を屠る。そして――

「これで打ち止め、みたいね」

斬った球体生物の数が二百を超えたあたりで、出現が止まった。

第2話：邂逅、契約（前書き）

どうにもアクセス数が伸び悩んでいます。あまり原作が有名でないからか、文章がマズいからか……。

第2話：邂逅、契約

赤銅色の雪のように積み重なっていた球体生物の亡骸が形を失い闇となり、溶けるように消えていく。

「さて……」

それには目もくれずに、マローネとクーシーは廃墟の一つに視線を向けた。

「そこの方、何か御用かしら？」

「気付かれてたんですね……」

廃墟の陰から出てきたのは白い服を着て杖らしきものを待った女性。マローネと入れ違いで森に来た女性だ。

「グウルルルルル……」

隠れていた上に杖に武器を持っている女性のことを敵対者と判断したのか、クーシーがつむじ風を起こしながら呻り声を上げ女性を威嚇する。

「大丈夫よウルフェン、戻って」

「……ウオン」

しかしマローネが制すると若干警戒心を残しながらも一声鳴いて答え、淡く光った後霧散し黒い金属板となった。それを収納用魔法陣に戻し、続けてスコピオンも仕舞うマローネ。一連の流れに啞然としていた女性だが、すぐに我に返り自己紹介をする。

「時空管理局、高町なのは一等空尉です」

「私はマローネ。請負人^{クローム}よ」

「請負人？」

「依頼を受けてそれを達成する仕事、要は何でも屋よ。大半は荒事だけど。私の方からも聞きたいことがあるのだけど――」

女性――なのはとの問答で、もともと確信に近かった予想が完全なものとなった。質問という形を取っているが実質は確認である。

「ここは、と言うよりこの世界はイヴォワールではないのね？ 時空管理局というレイヴン……、傭兵団や会社は聞いたことがないのだけ」

「そう、ですか……。ここはミッドチルダという世界で、マローネさんは次元漂流者、世界を超えての遭難者ということになります」

それからマローネはなのはから時空管理局やミッドチルダについて聞きながら、やって来たヘリで彼女が所属する部隊、『機動六課』の隊舎へと向かった。

機動六課隊舎、部隊長室。

現在この部屋にいるのは部隊長である八神はやとと分隊長のなのはとフェイト・T・ハラオウン、副隊長のシグナムとヴィータ、そしてマローネの六人。武器等を隠し持っていないことを証明するためにコートを脱いでいた。金属製の膝当てが付いた厚手の黒いアーミーズボンに同色の半袖シャツという飾り気の無い恰好で、首からは水晶のロケットに覆われた、銀色の台座に青い石がはめ込まれたペンドラントを提げている。そして五人が息を呑んだのは、マローネの両腕や胸元に刻まれた幾つもの傷痕。うっすらと残っている程度の

小さなものから、挟られたような大きなものまである。

ともあれいつまでも見ているのは失礼なので、はやては一つ咳払いをして、それぞれ自己紹介をしてから本題に入った。

「……それで、マローネさんの故郷のイヴォワールという世界なんです。現在までには確認されていないんです。搜索は続けていますが、最悪の場合は……」

「そう、ならこちらで身の振り方を考えるしかないわね」

未練が無いわけではない。無いわけではないが、それはイヴォワールにいたとしてもはや取り返ししようのないことなのだ。

「まだ帰れないと決まったわけではありませんが……」

「……あの、話は変わるんですが、一つ質問よろしいですか？」

ひとまず世界についての話が終わったところで、なのはがマローネに問う。

「ええ、どうぞ」

「あの時、狼が金属の板に変わったのは一体……。魔法ではなかったようですが……」

「あれね。イヴォワールでは先天的に生まれ持ったり後天的に目覚めたりして、特殊な能力を持つ人があるの。私は前者、持っているのは『奇跡の能力 ちから シャルトルーズ』。物体に霊魂 ファントム……。死者の魂を憑依させて一時的に肉体を持たせる能力よ。……もっとも、名前は父親の能力のをそのまま使ってるだけけど」

マローネの父、ヘイズのシャルトルーズは、治癒と現世への魂の定着という二つの効果があった。しかしマローネは後者の効果のことを知らない。何故なら――

ヘイズも母ジャスミンも、そして兄貴分アッシュも、彼女の家族の魂は誰一人として戻ってはこなかったのだから。

「……その力は、どうしても使わないといけないものなんですか？」

ややあつて、フェイトが険しい表情で絞り出すように言った。『命』を重んじる傾向が強い彼女には、マローネの力が死者を道具にしているように思えたのだらう。

「そうね。そちらのお嬢さんには言っただけで、請負人^{クローム}は荒事に関わる人が多いから」

「でも、他の仕事を選ぶことも——」

「無理よ」

「どうして!？」

叫ぶフェイトに、マローネは変わらぬビジネススマイルを浮かべたまま言った。

「能力者は迫害対象だもの、請負人が傭兵にしかねない」

「え……!？」

「迫害、って……、何でだよ……?」

フェイトが言葉に詰まり、ヴィータが思わず問いを漏らす。ミッドチルダをはじめとする管理世界では魔法の素質は生まれながらに決まっており、大きな魔力を持つ者、そして召喚魔法のような限られた者にしか使えない稀少技能^{レアスキル}を持つ者は例え若年でも優遇される。イヴォワールの能力者達は管理世界で言えば全員が稀少技能を持っていることになるというのに、何故優遇どころか迫害されるのか、ヴィータにはわからなかった。

「人は自分達と異なるものを排除しようとするものよ。能力の特性によつては嫉妬もあるかもね」

例えば、とマローネは続ける。

「『白狼騎士団』のラファエル団長は、剣速を大幅に上げる『極みの能力 ヘリオトロープ』を持っているけど、これは他の剣士からは卑怯と見られかねない力でしょう？」

「……修練でその速度を超えることはできないのか？」

「多分無理ね。残像ができるほどの速さだもの」

「なるほど、確かに卑怯と言えば卑怯かもしれない……」

口ではそう言いつつも、むしろ手合わせしてみたいと思う私は異常なのだろうか、と内心で呟くシグナム。

決してラファエルは能力に依存し驕るような男ではなく、鍛錬を怠らず騎士道精神を重んじる高潔な人物だ。だがそんな彼に対しても「能力者だから」と陰口を叩く者もいる。強大な魔力を持ち、幼少期から多くの戦果を上げてきたが故に少なからずそういったことを経験している隊長達は何も言えない。

「もつとも、私の場合は単純な異端に対する嫌悪だろうけど」

数いる能力者の中でも特殊な『靈魂と対話し、憑依させる』という力を持つマローネは、特に強い迫害を受けてきた。

『悪霊憑き』——それが彼女に向けられた蔑称。白眼視され、理不尽な中傷を受け、石やビンを投げつけられたこともあった。体中に刻まれた傷の中には、そうして付いたものもある。顔に付いた傷を重点的に治してきたのは、女としての無意識的な抵抗だったのかも

しない。

「あの、ごめんなさい……」

「構わないわ」

浅慮だったとフェイトは謝罪するが、マローネは気にした様子も無く答える。それが慣れてしまうほどに誹謗中傷を受け続けてきた彼女のこれまでを思い起こさせ、フェイトには罵声を浴びせられるよりも辛かった。

「いや、それにしてもマローネさんが腕の立つ人で良かったです。戦う手段の無い一般人やったらどうなつてたことか……」

場の空気を変えるために話を変えるはやて。決して明るい話題ではないが、あの雰囲気が続くよりはマシだ。

「あの変な生物、最近あちこちの世界に出てきて、騒ぎになってるんです」

球体生物ははつきり言って弱く、威力や腕にもよるが魔力弾一発、武器一振りで倒せる。厄介な特殊能力を持っているわけでもないの、新兵どころか訓練生でも苦戦することはまずない。では何故騒ぎになっているかと言うと、やたらと数が多いのである。一匹見かければなんとやら、七十匹を下回ることはなく、酷い時には三百匹を超えることもあるほどだ。その不気味な姿がウジャウジャと蠢き湧き出してくるさまは局員達の士気を削り、また弱いと言っても人間の肉を食い千切るくらいの力があるので、一般人には十分な脅威になる。新手の生物テロという可能性を考慮し、かつて世界を震撼させた『JS事件』の時からおよそ三年ぶりに機動六課が結成された。

……という旨をはやてから聞いたマローネは、忌々しさを感じさせる声音で吐き捨てるように言った。

「……やっぱり、昔から変わらず数だけが取り柄なのねあのゴミ共は」

「昔からって……、何か知ってるんですか!？」

身を乗り出さんばかりのはやてに一つ頷き、マローネは話し始める。

「十二年前、13歳の時に、アレの親玉とやり合ったことがあるの」

「親玉……?」

「……サルファー。『破壊神』とも呼ばれる、骨みtainな怪物よ」
「破壊神、サルファー……」

はやては考え込む。破壊神などと呼ばれるくらいなのだから、間違いないく強大な相手だろう。球体生物——サルファーの使い魔のこともある。より多くの戦力が欲しい。だから——

「マローネさん、あなたに依頼があります」

「何かしら?」

「力を、貸してください!」

「……具体的な依頼内容は『サルファーの討伐』でいいかしら?」

「——ッ、はい……」

マローネが浮かべた今までのビジネススマイルとは違う、牙を剥くような笑みに気圧されながらも、はつきりと答えるはやて。少しして、マローネの笑みが元に戻る。

「その依頼、受けましょう」

「あ、ありがとうございます！」

こうしてマローネは協力者として、機動六課に加わることとなった。

（サルファー……、今度こそ、今度こそ殺してやる！！）

彼女の胸の内で渦巻くどす黒い憎悪に気付くものは、まだいない。

第2話：邂逅、契約（後書き）

デイスガイア4のDLCでマローネが今日から配信ですね。これでマローネ無双ができるぜ！

それでは、感想お待ちしております。

第3話：請負人、その実力（前書き）

本作のマローネ、声のイメージはもちろん水橋かおりさんなのですが、声の感じはリメイク版のクローネの方が近いです。原作マローネだと幼過ぎる感じがするので。

第3話：請負人、その実力

「さて、それじゃマローネさんに実力の程を見せてもらいたいんやけど——」

場所は変わって訓練場観戦席。他のメンバーとの自己紹介が済んだところで、はやてがそう切り出した。

「すぐにいけますか？」

「ええ、問題無いわ。依頼を受けた以上、私が使い物になることを証明しておかないとね」

言って、マローネは訓練場に飛び移る。

「こっちからは誰が出る？」

「では私が——」

「待って」

立候補しようとしたシグナムをフェイトが制した。

「……意外だな、てつきりお前は彼女を避けがちになると思ってたのだが」

「これから一緒に仕事するんだから、そういうわけにはいかないよ。でも、口で何を言っても自己満足の言い訳にしかならなさそうだから、せめて競い合っていていきたいなって思っ……」

「そういうことなら今回は譲るが、変に手心を加えたりするなよ。彼女に対する侮辱になるからな。それに——」

マローネの方を鋭く見据えながら、真剣さを増した声音でシグナム

は続ける。

「そんなことをすればお前は確実に負けるぞ」

「あのく、あの人そんなに強いんですか？」

青髪の少女——スバル・ナカジマが尋ねた。フェイトは管理局屈指の実力者であり、三年前も機動六課に所属していたスバルもそれをよく知っている。表情から察するに先の質問は疑心よりも興味から来たものだろう。

「ああ。レイジングハートが記録していた映像を見る限りでは、型はメチャクチャだがひたすらに戦い慣れている」

「……大丈夫、油断も手加減もしないから」

フェイトもまた、訓練場へと飛び移る。

「お待たせしました。よろしく願います」

「こちらこそ。……ところで、私の能力の都合上多対一になるかもしれないけど、構わないかしら？」

「はい、大丈夫です」

策と言うほど大層なものではないが、一応シャルトルーズへの対抗手段は考えてある。

「二人とも準備はいいみたいやね。それじゃあ……、試合開始!!」

はやてが右手を振り上げ、宣言した。

「はあああつ!!」

「……」

裂帛の気合いと共に振るわれるバルディッシュによる斬撃を難なく防ぐマローネ。

「——ッ！」

何度かそれを繰り返したが時、目を見開くと弾く勢いを利用して後ろへと跳んだ。その直後、彼女がいた場所に金色の輪——バインドが現れる。

（読まれた！ でも……！）

不意打ちのバインドがかわされたことに少し驚きつつも、フェイトは魔力刃を展開させたバルディッシュを振るった。

「ハーケンセイバー……！」

「ふっ！」

撃ち出された魔力刃はマローネに一突きにされ砕け散るが、フェイトの周りには数個の魔力弾が。

「プラズマランサー……！」

「……」

魔力弾はマローネに届く前に地面から噴き出した電撃に打ち砕かれたが、フェイトは焦らない。プラズマランサーは時間稼ぎに過ぎず、本当の目的は別にある。

「ソニックフォーム……！」

フェイトのバリアジャケットの表面積が減り、バルディッシュの形が鎌から剣に変わった。そしてそれまで以上の速度でマローネに接近すると、連続で斬撃を繰り出し始めた。

ここまでの一連の流れ、媒体となる金属板を出す暇を与えないことが、フェイトが考えていたシャルトルーズ対策だ。

「てやあああああつー!!」

「随分、速いのね……」

やはりマローネは全て防いでいるが、速さが上がれば重さも上がる、徐々にガードが開き始める。

(いける！ このまま一気に――)

フェイトがそう思った時、

「……コンフライン憑依」

そんな弦きが聞こえ、同時に急激に威力が増したマローネの一撃によって弾き飛ばされた。

「くうつ……！ 一体何が――」

再びマローネを視界に入れた瞬間、変貌したその姿にフェイトは絶句した。

指先は骨のように白く硬くなりコートの上に肋骨や背骨の装飾が現れ、顔には竜の頭蓋骨のような仮面を着けている。

「……いくよ」

「ッー!!」

仮面の口が開き、光る。フェイトが半ば反射的に横に動いた直後、一瞬前まで彼女がいた場所を、丸太ほどの太さの黒い光線が駆け抜けていった。

「ほう、あんなこともできるのか」

一方その頃観客席。皆が啞然とする中、シグナムが感嘆の声を上げる。

「テストロツサは媒体を出させないようにしていたようだが、まさか自分自身にも憑依させられるとはな。これはマローネが有利になるか」

「あ、あの、憑依って……？」

冷静に戦局を分析するシグナムにオレンジ色の髪の少女——ティアナ・ランスターが恐る恐る尋ねた。無論『憑依』という言葉の意味を聞いているわけではないだろう。

「ああ、彼女の能力は魂……、有り体に言えば幽霊だな、それを物体に入れて召喚するものらしい」

「「「ゆ、幽霊！？」「」」

思わぬ返答にスバルと赤髪の少年——エリオ・モンディアル、桃色の髪の少女——キャロ・ル・ルシエが驚愕する。

「驚くのは無理ねえけど、偏見持ったりはするなよ。別に取って喰われるわけじゃねえんだから」

人格的に大丈夫だとは思っているが念のためにヴィータが釘を刺し、

それはそうと、と軽く笑いながら続けた。

「あの見た目といい技といい、どっかの少年誌の某死神漫画に出てきそうだな」

「ああ確かに！」

ヴィータとはやては楽しそうだが、実際に相對している方はそれどころではない。

「はあ……、はあ……」

憑依前コンファインとは一転、シグナムの予想通りフェイトは劣勢だった。連射と言っほどではないが頻繁に飛んでくる光線に加え、牽制にドクロ型のエネルギー弾が撃ち込まれてくるため、思うように距離を詰められないのだ。砲撃魔法ならばマローネの攻撃を貫けるだろうが、いかんせん魔力を溜める暇が無い。

（このままじゃジリ貧……、ちょっと危険だけど攻撃を相殺しながら一気に距離を詰めるしかない！ 光線を撃った後、次の攻撃までにほんの少し間が開くから、そこを突けば……！）

プラズマランサーでドクロを相殺しながら思考を巡らせるフェイト。ドクロの数が残り二つになった時、仮面の口が光った。

（今っ！！）

体を捻って紙一重で光線をかわしながら、マローネへと接近、バルディッシュを振るう。突進力も加わったその一撃で、マローネの体勢が崩れる。

「これでえっ——！」

止めの攻撃を繰り出すためにフェイトが腕に力を籠め、そして――

「ご苦労様、ペック」

その腕に何かが巻き付き、動きを阻害した。

それは白く細長い尻尾で、その主は黄色いローブを被った蛇のような体の魔物――スペクター。ペックと呼ばれたそのスペクターの両腕、もといローブの両袖はフェイトの方に向けられており、その先端には電気が溜まっている。

「い、いつの間に……？」

「最初からよ。具体的には私がこの世界に飛ばされて目が覚めた時からずっと、この子は私の足下、地面の中にいたの」

スペクターが属する妖霊族は肉体そのものが魂に近く、壁や地面をすり抜けることができる。この特性に目をつけ、マローネは護衛として常に一体地中に忍ばせているのである。

「さあ、どうする？」

尋ねるマローネが着けている仮面の口には、すでに光が溜まっている。体に接触している以上、高速で移動して離脱してもペックは付いて来てしまう。さりとて彼を振り払おうとすれば、その間にマローネから光線が飛んでくる。この状況でフェイトが取れる手段はただ一つ、

「参りました……」

降参することだけだった。

第3話：請負人、その実力（後書き）

そろそろアサギの方も執筆したいですね。

第4話：軽い対話、見えぬ底（前書き）

原作ではマローネが能力に目覚めて請負人になったのは十一歳の時（電撃ゲーム文庫参照）らしいのですが、本作では大分異なります。予めご了承ください。

第4話：軽い対話、見えぬ底

模擬戦が終わり、ペックは再び地中へ沈んでいきマローネは元の姿に戻った。

コンファイン
「憑依」

続いて額から角が生え、両肘両膝から先——見えているのは手首から先だけだが——が鋭い爪と剛毛を生やした獣のものに変わる。ウルフェンの魂を憑依させたマローネは大きく跳躍して観戦席へ跳び移り、再度元の姿に戻った。フェイトは飛んでその後続く。

「ほう、息一つ乱していないとは……。まだ余力があるようだな。やはり無理を言っても私が出ておけばよかったか……」

「て、手加減されてたんだ……」

シグナムが感嘆しつつ本音を漏らし、フェイトが落ち込む。自分の攻撃を悉く防がれ、その上手加減されていたという事実はなかなかに堪える。

「そう気を落とすなテストロッサ。お前が弱いわけではない、速度と魔力以外で彼女が上回っていたただけだ」

「フォローになってないよそれ……」

シグナムのフォローという名の追い討ちにますます落ち込むフェイト。なお、マローネの魔力はB - 相当。憑依状態では魂の魔力に応じて増加し、先の模擬戦ではA相当となっていた。

「そこは経験がものを言った、ってところね。伊達に二十年も請負^{クロ}ム」

人やってきたわけじゃないもの」

「に、二十年!？」

予想外の言葉にフェイトが驚く。部隊長室での話から十二年前の時点では請負人になっていたことは推測できたが、まさかその倍近い経験を積んでいたとは。

「それじゃ、マローネさんって実は結構な高齢——あいたっ!」

「このバカ! 軽々しくそういうこと言うんじゃないの!」

一方、彼女の実年齢を知らないスバルが直球で質問し、ティアナにはたかれた。実際高齢ではないため、マローネは気にすることもなく答える。

「イヴォワールにはラファエル団長みたいに外見と歳が釣り合わない人もいるけど、私は二十五歳、外見相応なんじゃないかしら」

『白狼騎士団』団長ラファエル、彼の見た目は二十代前半の美青年だが、実年齢は軽く見積もっても六十歳を超えている。若作りというレベルを超越しているため、『倒した相手の若さを吸い取っているのでは?』という噂さえある（本人は否定しているが）。

「ところで、イヴォワールには変わった生き物が多いんですね」

五歳という幼さで請負人という危険な仕事に就いているあたり、能力者であること以外に何か事情があるのではないかと思ひ、なのはが話題を変えた。

「ああ、あの子達はイヴォワールにいたんじゃないの。『魔界』っていう、人間やイヴォワールのモンスターよりもずっと強い生物が

住む世界にいたのよ。修練のためにそこへ行った時にスカウトしたの」

高濃度の魔力がそうさせるのか、魔界の生物はたとえ同種であつてもイヴォワールのそれより戦闘能力が高い。聞いた話では魔界は幾つも存在し、それらを治める『魔王』と呼ばれる者達の中には容易く世界を消し飛ばせるほどの力を持つ者もいるという。恐らくサルファーさえも瞬殺できるのだろう。

だがマローネは魔王を探し助力を請うことはしなかった。それほどの存在がたかが人間の小娘の頼みを聞いてくれるとは思えない。それに何より――

（サルファーは私が、私の手で殺す……！ 絶対に……！）
「なるほど、強いわけだ。……ところで、一つ提案というか、頼みがあるのだが」

シグナムの言葉で思考を中断し、そちらに意識を向けるマローネ。

「短時間でもいい、明日から実戦形式で訓練に参加してくれないか？ 隊長陣も今一度鍛え直しておいたほうがよさそうだからな」
「……ええ、私としてもこっちでの戦い方をより多く体験できるのはいいことだしね。引き受けましょう」

僅かに考えた後、にこやかに答えるマローネ。

「ありがたい。よろしく頼む」
「……よろしく願います！」
（良かった、打ち解けてるみたいで……）

マローネ達の方を見ながら、フェイトはそつと安堵の息を漏らす。

自身が過剰反応してしまったこともあったので、マローネが他のメンバーとうまくやっていけるかどうか不安だったのだが、問題なく打ち解けているように見える。だから、

彼女の笑顔が社交辞令や愛想笑いとは違う、何か仮面のようなものに見えたのは、気のせいだと思ったかった。

第4話：軽い対話、見えぬ底（後書き）

アサギの方を待っていた方、すみません。完結までのストーリーは
大体思い浮かんでいるのですが、戦闘シーンが……。しばらくはこ
っちがメインになるかもしれません。

第5話：日常、そして現るサルファアの影（前書き）

今回、色々な能力が名前だけ出てきます。どれが誰の能力か覚えて
いますでしょうか？

第5話：日常、そして現るサルファ―の影

夢を見た。二十年以上前のこと、幼い自分に長い水色の髪的女性――ジャスミンと、黄緑色の短髪の大柄な男性――ヘイズが語りかけている夢だ。

『マローネ、あなたはその能力ちからのせいで、きっと多くの人に嫌われることになる。でも、その人達を恨んではダメ。あなたの能力は、誰かを助けるためにあるんだから』

『人を信じるんだマローネ。思いやりのある優しい子になれば、いつかきっと――』

そこで目が覚めた。ベッドから起き上がる。寝ている間も布団は被らず、いつものロングコートを着ていた。これも昔からの癖、就寝中に襲撃された最に速やかに対処できるよう、動きを阻害しないためである。

（あの言葉が無邪気に信じていた時もあつたわね。現実はそのように甘くないのに）

自嘲気味に内心で呟きつつ着替えを済ませ、ペンダントを首にかけた。

「ペック、交代よ」

「キキッ！」

床から湧き出すように現れたペックを霊体に戻し、落ちた金属板に別ファントム・コンフラインの靈魂を憑依させる。具現したのは外見は彼とほとんど変わらない、別個体のスペクター。

「クック、お願いね」
「キッ！」

別個体のスペクター——クックが床に潜航するのを見届け、マローネは部屋を後にした。

訓練場。FWの四人とシグナムがマローネと実践形式の訓練を行っている。シャルトルーズによる戦力増加が可能なため、必ずしも多対一にはなり得ない。

「はあっ！！」
「……」

シグナムと鎧の剣士が切り結ぶ。幾度もの打ち合いの後、

「紫電一閃！！」
「……！」

シグナムは炎を、鎧の剣士は電気を纏った斬撃を放った。爆発が起こり、両者が吹き飛ぶ。

「シュランゲフォルム！！」

シグナムの持つ剣、レヴァンティンが蛇腹剣となり、変則的な動きで鎧の剣士に迫る。

「……」

彼は剣をバトンのように回転させながら右へ左へ持ち替え連結刃を

弾き返し、刃がシグナムの下へ戻り始めた瞬間に、彼女に飛び掛かり属性付加の無い、ひたすらに鋭く重い一撃を振るった。とっさに飛び退いてそれをかわすシグナム。

「フッフ、変幻自在な剣技を使うな……。イヴォワールのものか魔界のものかは知らんが、全く驚かされる」

『アタシはむしろアレが生物だってことに驚きだよ……』

楽しげなシグナムの言葉に呆れたように返すのは、現在彼女と融合しているユニゾンデバイスのアギト。ユニゾンデバイスとの融合はマローネの自身への憑依に近いが、あそこまで姿が変わったりはしない。髪の色が変わるくらいだ。
ちなみに、アギトの外見はある魔神に酷似しているが、特に関連性は無い。

閑話休題。

彼女が驚きと言ったのは鎧の剣士の外見。何せ『鎧を纏っている』のではなく、『鎧そのもの』なのだ。それが証拠に鎧の隙間からは向こう側が見えている。その上頭が無く、首の辺りから炎が噴き出している。

妖騎士族に属する魔物デユラハン、名はラッハ。

「さあ次はどう来る？ 風が炎か電気か、それとも無属性の斬撃か

……」

『楽しそうだな……』

アギトの言う通り喜色に満ちたシグナムと対照的に、ラッハは終始無言。そもそも発声機能を持つかどうかもわからないが。その顔の無い鎧からは感情を感じられないが、

『考えてることは同じっぱいな』

首の炎をより大きく燃え上がらせる姿を見て、アギトはそう呟いた。

一方、FW陣。

「でやああああああ！！」

「ふっ！」

スバルが右拳から撃ち出した魔力弾を、マローネがスコピオンで弾く。初めから予想していたのか、スバルはそれに構わずローラー移動による推進力の加わった拳を繰り出した。

「憑依」

受ける直前にマローネの髪が深緑に染まり、両腕両脚が分厚い樹皮に覆われる。本来ならば大きく弾き飛ばされるであろう衝撃を、僅かに後退する程度で堪えた。力が拮抗したところでスバルを突き飛ばし、帯電したスコピオンで突きを放つ。

「くっ！」

スバルが展開、スコピオンを受け止めた。ヒビが入ったものの貫かれることはなく、後退して衝撃を受け流す。その時、

「わっ！？」

何かに足を払われ、大きく体勢を崩した。彼女からは見えないが、マローネの足下から伸びた影、その腕が立体化している。

「せいっ！」

「うっ……！」

胴を薙ぎ払われ吹き飛ぶスバル。入れ替わりざまにエリオが槍、ス
トラードを構えて疾駆するが、

「そんな!？」

穂先の下、棒の部分を人間離れした力で掴まれ、止められてしまっ
た。そのままローネはエリオの眼前にスコピオンを握った右手
を突き出し、エネルギー弾を撃ち出す。そして影を立体化させ、背
後から迫っていた数発の魔力弾を叩き落とした。

「見切られてる……、いや、見てないから見切ったとは言わないか
……」

投影されたビル群の陰に身を隠しながらティアナが呟く。影の立体
化や槍を掴むことに比べればまだ現実的だからか、攻撃を全て相殺
されたことに対する驚きは小さい。

（キャラの方も手詰まりみたいだし、かと言ってこっちも——！）

上空でニメートル半ほどの蛾のような魔物——メッセンジャー、名
はモルフオ——に攪乱されているキャラとその召喚竜、フリードこ
とフリードリヒに僅かに視線を向け、その場から飛び退く。直後、
先程まで彼女がいた所から電撃が飛び出した。

（そこっ！）

電撃の根本にアンカーを撃ち込み、引っ張る。さながら魚釣りのように、袖にアンカーの先端を付けたクツクが地面から現れた。

いかに妖霊族に壁や地面を透過する能力があるうとも、撃ち出す攻撃はそうではない。そのため外に攻撃を通すには僅かでも体の一部を出さねばならない。

「キキツ！」

クツクが再び撃ち出した電撃を横に跳んでかわし、数発の魔力弾を飛ばすティアナ。クツクは電撃で難なく相殺するが、

「キツ！？」

反射的に横へ振った尻尾に何かが掠った。見えないようにされている魔力弾があつたのだ。

「キキキ……」

妖霊族は高い魔力総量と回復速度を誇るが、反面非常に打たれ弱い。当たらなければどうということはないが、逆に言えば威力が低くとも当たれば非常にまずいということである。故にクツクにとって最も厄介なのは視認できる大火力攻撃ではなく、ひっそりと忍び寄る小技。

目の前の少女が最も危険な相手であると判断し、クツクは両袖から長大な氷柱つららを生やし臨戦態勢を取った。

『ティア、援護！』

『……悪いけど、無理そう』

スバルから念話が届くが、ティアナはにべもなく返す。

『目、付けられたみたい』

そう続けるとほぼ同時に、氷柱を構えたクックが疾駆した。

それからしばらくして、シャワールーム。

「あゝもゝ負けたゝ！ マローネさん強いゝ！」

体を洗いながらスバルがぼやく。彼女の言葉からわかるように、結果はマローネと^{ファントム}靈魂達の圧勝だった。なお、シグナムとラッハは相打ちだったらしい。

「実戦でかなり叩き上げられたからね。もともと私の能力は戦闘には不向きだったから」

「そうなんですか？」

驚くティアナ。戦力を増やしたり状況に応じて戦闘スタイルを変えたりと、傍からみればこれほど戦闘に向いた能力もそう無いと思える。

「自分に憑依させるのは後から編み出した技よ。物質への憑依も初めは長くても十分足らずだった」

かつてのシャルトルーズはマローネ自身が弱点となり得る能力であった。戦闘力は靈魂に依存し、ヘリオトロープや身体能力を極限まで引き上げる『勇猛の能力 メガロ・クロツカス』のように使用者を強化するわけでもない。圧縮した大気を撃ち出す『風神の能力 オウル・ミョゾティス』や、巨大な氷塊を造り出す『乙女 of 能力 コバルト・ブルー』のように属性攻撃を行うこともできない。そし

て同じ召喚系能力、ゾンビを呼び出す『魔道的能力 ヴィリディアン・カッパー』と違い制限時間がある。頼るにはあまりにムラが多い能力。

故にマローネは自分自身を使い物になるよう鍛えた。いや、正確には実戦を通して鍛えられたと言っべきか。幾つもの傷が刻まれた体は十代の頃と比べると硬く引き締まり、女性的な丸みに乏しくなった。

(……………)

もつとも、胸は昔から絶壁^{ベタンコ}だったが。

ミッドチルダ郊外。

「くっ、次から次へと……！」

十数人の武装隊員がサルファアの使い魔と戦っている。使い魔は今までの赤銅色のものだけでなく紫色や枯れ草色のものも混ざっており、それらは若干赤銅色よりも強い。とは言えやはり大したことはないのだが、倒しても倒しても湧き出てくるため、隊員達の魔力と気力は枯渇しつつあった。

「な、何だコイツは!？」

隊員の一人が叫ぶ。それが彼の最後の言葉となった。突然巻き起こった大爆発によって、周囲の使い魔もろとも木端微塵に吹き飛んだのだ。

爆発を起こしたのは巨大で禍々しく、使い魔達とは別格であることが一目でわかるモンスター。

「どうし——ぎゃっ！」

「た、助け——がっ！」

肉が裂け骨が碎け内臓が潰れる音、そして隊員達の断末魔が響き、同時に機動六課にアラートが鳴り響いた。

第5話：日常、そして現るサルファーの影（後書き）

『鍛えて能力が強化される』というのは公式設定みたいです。クロ
ーネは一人に限って憑依を二週間持続させてましたし。

第6話：回想・永遠になった留守番（前書き）

大学の課題がサルファアの使い魔の如く湧いてきてなかなか筆が進みませんでした……。

なんか今回のサブタイトルと似た名前のエログロいゲームがあるそうですが、全く関係ありませんので予めご了承ください。

第6話：回想・永遠になった留守番

狙撃手兼パイロットのヴァイス・グランセニックが操縦するヘリに乗り、襲撃のあった郊外へと向かう機動六課スターズ分隊とマローネ。現場の状況を映すモニターが空中に現れる。

「デケエ……」

「今までとは違う……！」

使い魔の群れの他に、四体の異形の姿があった。体長はおよそ五メートルほどで骸骨のような外見をしており、両腕と下半身は無い。だがまるで引き千切られたかのように肉が覗いていて、骨片の刺さった両手を地面に着き、上半身が浮いているにも関わらず這いずるように移動している。

「マローネさん、この怪物は……？」

「……サルファアの分身、異次元から漏れ出したサルファアの力が形になったものよ。曲りなりにもアレの一部だから、並みの戦士じゃ太刀打ちできないくらい強いわ」

マローネの言葉を聞き、そして並みの戦士、もとい魔導士のなれの果てであろう散乱したグロテスクな物体を見て息を呑む一同。そんな中、マローネは一人過去に思いを馳せていた。

二十年前、マローネ五歳の誕生日。

「それじゃあマローネ、言ってくるからね」
「うん！」

自身に目線を合わせ微笑みながらそう言う黒い短髪の青年——アッシュに、元気いっぱいに答えるマローネ。

「帰ってからちゃんとお祝いしましょう」

「今日中に必ず帰ってくるからね」

「うん！　いつてらっしゃーい！」

大きく手を振って三人を見送って家に戻ると、自身の身長からするとやや高い椅子に飛び乗るように座り脚を揺らす。

いつもは寂しい一人ぼっちの留守番だが、綺麗に飾り付けされた部屋や鏡に映るおめかしした自身の姿を見ると、自然と楽しい気分になってくる。

「あめ……。みんな、だいじょうぶかなあ……」

夕方になり、雨が降り始めた。危なげに窓枠によじ登って外を見る。雨脚はどんどん強くなり、どうにも止みそうにない。

「こわいよお……。おとうさん、おかあさん、アッシュ……」

夜が訪れると雨だけでなく雷まで鳴り始めた。少しでも恐怖を紛らわすためにベッドに潜り込み、ウサギのぬいぐるみを抱きしめる。結局その日は三人が帰ることなく終わった。そのことに怒り、独りで迎える二度目の夜に泣き、そうして五日も過ぎる頃には子供ながらに察した。ヘイズもジャスミンもアッシュもきつと、もう帰ってはこないのだと。

それから七年が経ったある日、マローネはかつてサルファーが襲来したいわく付きの島——魔島へ向かっていた。手掛かりが少なすぎるため難航していたが、『白い骸骨のようなモンスターの討伐依頼

を受けて魔島へ行った三人の請負人^{クロム}』の話をとある情報屋から聞いたのだ。

「ああ……」

岩肌が露出し僅かに枯れ木が立つだけの荒れ果てた大地を進んだ先に、それはあった。

「これは、アツシュの……」

力無く伸ばされたマローネの手の先にあるのは、灰色ばかりの魔島では一際目立つ澄んだ水色の剣。リゾート地として名高いやし湖島、そこでかつて守り神として崇められていたドラゴンの牙から作られたという、『水竜の剣』。

「……グルルルルル……」

あちこちから低い呻り声が響く。マローネが視線を巡らせると、炎のような鬣^{たてがみ}を持つライオン型モンスター・マンティコアとその骨に魂が定着して生まれたモンスター・ケルベロスが、彼女を取り囲んでいた。

ロクに植物も育たない魔島では食糧の確保も難しいため、骨だけのケルベロスとはかくマンティコアは大ケガ覚悟で共食いすることにも珍しくない。そのため彼らにとって身の程を弁えずに魔島にやって来る請負人や傭兵は恰好の獲物となる。まして程よく引き締まった体のマローネは最高のご馳走になることだろう。

とは言え彼女もみすみす食われる気は毛頭無い。背負った槍と地面に突き立っている水竜の剣に手を掛ける。

「――！！」
「グオオオオオウツ！！」

両方を構えると同時に、モンスターの群れが飛び掛かった。

それからのことはよく覚えていない。気が付いたら自身とマンティコアの血に塗れた状態で玄関に立っていたのだ。

『きつと』が『絶対に』に変わっただけ、わかっていたはずなのに、胸に穴が開いたような虚無感に襲われた。涙は、流れなかった。

「そろそろですぜ！」

ヴァイスの声に意識を現実に戻した。スコーピオンを取り出しつつハッチ付近へ移動し、モルフオを憑依させ翼を生やす。そしてハッチが開くと弾丸の如く飛び出した。

「彷徨える魂よ！ 導きに従い現れ出でよ！ 奇跡の能力！！ちから シヤルトルーズ！！ モック、カルム、行つて！」

「グオオオオオオオオツ！！」

飛びながら金属板を二枚落とし能力を使用、現れたのはモックと呼ばれた四メートルほどの樹木の巨人――ウッドゴーレムと、カルムと呼ばれたモックと同サイズの骨だけのドラゴン――骨竜。

地響きを起こしながら着地すると、カルムはドクロを撃ち出して周囲の使い魔を駆逐し、モックは使い魔を踏み潰しながら分身体へと駆け出した。

「オオオオオオオオオツ！！」

「ギ……、ガ……！」

硬い拳が分身体を幾度も打ち据える。受け止めようにも体から分離した手では衝撃を殺し切れない。手ごと体に叩きつけられ、指はひしゃげてその機能を失ってゆく。それを好機と見たモックはさらに距離を詰め分身体に掴みかかり、首をへし折ろうと力を込めた。

「ガ……アアッ！」

「ゴー？」

熱を感じすぐさま手を離して飛び退く。直後、分身体の口から太い光線が放たれ、モックの左肩を貫いた。辛うじて繋がっていたものの、自重に耐えられず腕が千切れ落ちる。

「ガ……、ゴオ……！」

樹液——他の生物で言う血液が流れ出す傷口を押さえ呻くモック。その隙を突いて分身体が再び光線を放つが、モックはほとんど倒れるように屈んで回避した。そして分身体に飛び掛かって押し倒すと、右腕を頭に巻き付け擦じり上げ始める。

「ゴオオオオオオオオッ！！」

「ガ……ア……！」

とうとう限界を迎え、分身体の頭が本来有り得ない方を向いた。止めに地面と拳に挟み込まれ血をぶちまけて爆散する。残された体は僅かに痙攣した後完全に停止し、闇となって血溜まりもろとも消えていった。

なお、ここまでの間に数十体の使い魔がモックに飛びかかっていたが、その大部分は分身体との戦闘に巻き込まれ消滅、運良く齧り付いた個体も表面を削る程度しかできず、すぐに振り落とされ踏み潰された。

「ゴゴウ！」

「グルルツ！」

肘のあたりまで再生した左腕にチラリと視線を向け、別の分身体との戦闘はまだ難しいと判断したモツクは鈍足故に使い魔の殲滅に専念していたカルムを呼ぶ。傍で聞いていれば何を言っているのかわからないが、彼らは互いにわかっているらしい。

カルムの体が一瞬光り、その直後に一本の槍に姿を変えた。それをモツクが掴み、ある方向へと力いっぱい投げつける。

所変わって、なのは。

「ゴアアアッ！！」

「デイベインバスタアアアアッ！！」

光線同士がぶつかり合って爆発を起こし、砂埃と使い魔の残骸が巻き上がる。それが晴れる前になのはは魔力弾を何発も叩き込むが、分身体は堪えた様子もなく両手を振るい彼女を切り裂かんとする。障壁を張りつつ後退して事無きを得た。まだ手傷は負っていないものの、なのはの表情は優れない。

（これじゃ、埒が明かない……！）

普通の魔力弾はノーダメージ、デイベインバスターでも表面が少し爛れるだけで決定打にはならない。スターライトフレイカー収束砲撃ならばさすがに通るだろうが、相手はそんな暇を与えてはくれない。補足される前に遠距離から撃ち抜いてしまうのが得策だったが、今となっては後の祭りだ。それでも、今打てる手はそれしかない。

（どうにかして距離を取って――）

頭の中で考えを巡らせ始めた時、

「ガ――！？」

分身体の頭が弾け飛んだ。地面に倒れ伏した体の上にはカルムの姿が。

槍状態でモックに投げ飛ばされた後に空中で変身を解除、分身体の頭に噛み付きゼロ距離で光線を撃ち出したのだ。

窮地は脱したもののあまりにも急激な状況の変化に付いて行けず硬直していたなのは、生き残りの使い魔が群がってきていることに気付いて慌てて動き出した。

「ゴアアアアアアアアッ！？」

分身体の苦悶の絶叫が轟く。流れる血が体色を赤く染め、その両手はもはや元が手だったとわからないほどに無惨に焼け潰れていた。

「喚くな鬱陶しい」

冷然と言い放ち、マローネはスコーピオンの先に展開された闇色の刃を振るう。肉塊同然の両手が両断され、返す刀で喉を斬られ鮮血が噴き出した。

「飛雷針」

「――ッ！！」

マローネが投擲した闇色の電気を纏うスコーピオンが、斬られた喉

に突き刺さる。血液が蒸発する音と絶叫の二重奏を響かせ、分身体は仰向けに倒れ果てた。

「まず一体。次は——」

使い魔を薙ぎ払いながら視線を巡らせていたマローネは、ある一点を視界に入れた瞬間目を見開く。

「……っ!!」

そして半ば無意識にその方向へと飛び出した。

マローネが分身体を屠る、少し前。

「くっ！ このっ！」

引っこり無しに飛び掛かってくる分身体を殴り飛ばすスバル。しかしその動きは普段より荒い。

（ちよつとスバル！ 焦りすぎよ！）

（ごめんティア！ わかつてる、わかつてるんだけど……！）

魔力弾と幻影で分身体の注意を引き付けているティアナの念話による叱咤に、スバルは唇を噛み締めつつ答える。

彼女の胸の内では、彼女自身にも判別の付かない感情が渦巻いていた。局員達を惨殺した分身体への怒りか、ヘタを打てば自身もそうなるという恐怖か。恐らくはその両方と、その他の雑多な感情が混ざり合ったものだろう。それが彼女から冷静さを奪い、動きを乱す。だから、反応が遅れた。

「スバル後ろっ!!」
「え——？」

振り向いたスバルの眼前には手を残して自身の方へ飛んできた分身体、その大きく開かれた口内に広がる赤が。ようやく気が付いた。今まさに喰われようとしているのだと。

肉が千切れる音がした。

（あれ……？）

意識がある。それどころか痛みさえ無い。やや硬い感触が顔に伝わってきて、思わず閉じていた目を開くと黒い布地が視界に入った。誰かに抱きかかえられていると気付いた次の瞬間強い振動を感じた。

「マローネさん……!？」

立ち上がったスバルが目にしたのは、背中の肉と羽を食い千切られたマローネの姿。先程感じた振動は彼女が地面に激突した時のものだったのだ。

「オオオオオオオ……」

「雷……神斧……」

分身体の声に呼応してマローネ達のそばで魔力が渦巻き大気が軋むような音を上げ始め、スバルに続いて立ち上がったマローネは飛雷針以上に激しく帯電——否、これはむしろ放電——するスコープオンを構え駆け出した。

（届けっ!）

「ゴウツ!？」

そこに分身体の両手と戦っていたティアナがその動きをバインドで止め、魔力弾を撃ち出した。うまく目に命中したことで分身体が怯み、渦巻いていた魔力が乱れ霧散する。

「であああああああつ!!」

「ガアア——!!」

激しく放電するスコーピオンを叩きつけられ、分身体の頭が弾け飛んだ。噴き出た分は蒸発し、傷口は焼き潰されているため血の一滴も零れない。

「援護、感謝するわ」

「い、いえ、それよりもケガは？」

「大丈夫よ。……モック、戻って!」

「ゴ……」

霊体化したモックを憑依させると、治癒魔法『キャロル』で薄皮が張る程度に治されていた傷が塞がり始める。

残りの一体の分身体は既にヴィータが片付けていたため、使い魔を殲滅し局員の亡骸を元の部隊へと送り届ける手配をして撤収となった。六課の面々に命に関わるような重症を負ったものはいない。

しかし、傷は目に見えぬ所に、深く刻まれていた。

第6話：回想・永遠になった留守番（後書き）

スバルが喰われかけるシーンは某魔法少女アニメの第3話終盤をモチーフにしてたりします。何気に中の人がマローネと同じだったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098x/>

リリカル・ブレイブ ～闇を抱きし靈魂使い～

2011年12月4日19時48分発行